

原 隆一編

『風土・技術・文化－アジア諸民族の具体相を求めて－』

(シリーズ21世紀の民族と国家 第6巻)

未来社 1998年 287ページ

天野 智浩

本書は伝統技術、あるいは在来技術が、産業革命に始まる近代技術の導入により、大きな影響を受け変容する様態を、アジアの諸民族の具体相の中で見ていき、それを媒介にして、現代のアジア諸地域の現状と変容を明らかにすることを目的として書かれている。伝統技術とは「特定地域の自然生態環境に規定されながら、それに適応するように生み出されてきたもの」と説明されている。

本書は7章から構成される。第1章の林論文は、総論にあたる部分である。そこでは、同一の技術原理が場所ごとに異なる修正を受けて定着することで、発展が不均等になること、また、最新設備の現場において在来技術への需要が高まっていることなどに注目しながら、「在来の『地方的』技術と現代の『普遍的』技術とのあいだに『共棲』の発展する余地はある」ことが指摘されている。

第2章の新納論文は、朝鮮半島における「犁」技術に焦点を当て、犁が生産用具として不可欠であること、地域的にも多様な展開を見せていることが論証されている。

第3章の服部論文は、東アジア地域における「手漉き紙」の技術の伝播に焦点を当てている。ここでは、日本・韓国において「溜漉き」「流漉き」の二つの少紙法が行われているが、中国大陸には「流漉き」が伝わっていないことから、流漉きが朝鮮半島で止まっておりそれ以西に伝わっていないことが仮説として提示されている。

第4章の吉松論文では、中国雲南省から北部タイに移住した回族の末裔であるチン・ホーの「食文化」技術とその変容が扱われている。チン・ホーは、イスラームという枠組みを維持しながらも、雲南省の回族とは異なった文化を形成していることが指摘されている。

第5章の多田論文は、インド亜大陸における灌漑揚水具の歴史的展開、特に、「ペルシャ水車」技術に焦点が当てられている。このペルシャ水車の出現は、ヒンドゥー文化がイスラーム文化と接触した結果の一つであると考えられている。

第6章の原論文は、人類史上にとって重要な農業拠点、交易拠点であった砂漠オアシスの伝統技術を対象にして、「カナート（地下水路）」の生産と生活技術を扱っており、そこでの変化などの具体相を描きだしている。

第7章の上田論文では、東アフリカのタンザニアにおける「コーヒー生産とその加工」技術に焦点が当てられ、そこでの小農生産を掌握しようとしてきた国家の試みが考察されている。その上で技術的介入だけでは、低品質、低収入、生産の粗放化、出荷量減少という悪循環を逆転することはできないことが指摘されている。

編者の原隆一氏は、大東文化新聞で、ユーラシアを南北に走る「技術の根幹道路」の他に「技術の道」が何本も延びていることがこの調査研究によりわかったことを指摘し、「この東西と南北の交差する地点こそ人間移動の

広大なネットワークの結節点であり、ヒトやモノや技術や文化などが集積している『文化の十字路』でもある」と述べている（1999年、第503号）。

特定の地域の現状や変容を考察するには、さまざまな要素を取り上げることが可能であると思われるが、その中で伝統技術を取り上げていることは注目に値するであろう。技術と聞くと、最新技術、あるいは西洋技術を思い浮かべてしまいがちだが、ここでは、そのような技術が常に万能なわけではないことがいくつかの事例の中で示されている。しかし、そのような最新の技術を全面的に否定するのではなく、第1章の林論文で述べられているように、両技術の「共棲」の可能性がしめされていることも見落としてはならない。また各論文において、各地方の伝統技術について詳細な考察も行われているので、ここで紹介されている地域の技術を研究する際にも手助けとなるはずである。